

omnividens

【オムニヴィデンス】



日本を代表する鉱石 黒鉱 KUROKO

黒鉱はその名の通り黒色をした鉱石で、閃亜鉛鉱や方鉛鉱、四面銅鉱などの硫化鉱物の小さな結晶が複雑に入り混じっています。東北地方の背骨にあたる奥羽山脈中に黒鉱の鉱床が分布していますが、それは大昔の地殻変動にともなう海底火山の活動によって形成されたと考えられています。黒鉱の精錬技術は日本独自に開発され、小坂を代表とする鉱山で 20 世紀終わりまで金、銀、銅、亜鉛をさかんに産出していました。

産地：秋田県小坂鉱山、釈迦内鉱山、青森県温川鉱山

撮影：菊地美紀

下の写真は小坂鉱山最盛期（20 世紀初頭）の露天掘り現場。



DOWAホールディングス株式会社 提供

2010.10
NO. 37

「はやぶさ」が仙台にやってきた

小惑星探査機「はやぶさ」の実物大模型を展示

2010年10月3日～10月10日 於：東北大学片平キャンパス エクステンション教育研究棟広報展示スペース



はやぶさ実物大模型 展示会場のようす

3億km離れた小惑星へ旅立ち、7年の歳月をへて、2010年6月ついに地球に帰還した小惑星探査機「はやぶさ」。数々のトラブルにみまわれながらも小惑星のサンプルを回収して戻ってくるという偉業をなし、多くの人びとに感動を与えました。このたび関係機関、関係各位の協力のもと、東北大学総合学術博物館、理学研究科、総務部広報課などが主催して、小惑星探査機はやぶさの実物大模型を展示する企画を実施しました（共催：河北新報社 協力：JAXA 協賛：NEC 東北）



はやぶさ模型が到着



1. はやぶさ模型

このはやぶさ模型は実物と同じ大きさで、太陽光に対する本体の耐熱性能を試すための熱構造試験にもちいられたものです。本体筐体の構造や断熱材は実物と同じ造りと材質でできています。太陽電池パネルをひろげた姿で横幅5.7mあります。直方体の本体筐体とアンテナ部、両翼の太陽電池パネルといった主要外観に加え、航行に必要な本体部の4基のイオンエンジンや12基の化学推進エンジンラスタ、小惑星表面に接地して試料を採集するための装置であるサンプラーホーンや、採集した試料を格納して帰還時に地表に投下される再突入カプセルが再現されています。さらに、補助アンテナの中利得アンテナ、位置確認のためのスタートラッカー（星姿勢計）、着陸時の制御に必要なレー



再突入カプセルが見える側。下面には各種機器があり、サンプラーホーンが突き出している

ザー距離計や高度計、観測のための蛍光 X 線分光器、近赤外線分光器、可視光カメラ、3 個のターゲットマーカーといった機器類のほか、小惑星表面を移動して観測する小型探査ローバー・ミネルバもちゃんとついています。この実物大模型をながめて 3 億キロの宇宙の旅に思いを馳せれば感動もひとしおとなります。

また、はやぶさ模型のほかに、イオンエンジンのエンジニアリングモデルも展示しました。イオンエンジンの耐久試験にもちいられ、必要条件の 1.6 万時間をクリアして、2 万時間の耐久性能をだしたものです。



イオンエンジン エンジニアリングモデル

2. はやぶさ計画を支える東北大の研究

はやぶさ計画は長期間にわたって計画、実行され、数多くの研究者や技術者たちに支えられたものですが、その中で東北大学の研究者も重要な役割を担っています。小惑星のサンプルを採集する機構を開発した工学研究科・航空宇宙工学専攻の吉田和哉教授と、採集したサンプルの分析を担当している理学研究科・地学専攻の中村智樹准教授の研究を展示パネルで紹介しました。



東北大の研究を紹介したコーナー



工学研究科 吉田和哉氏



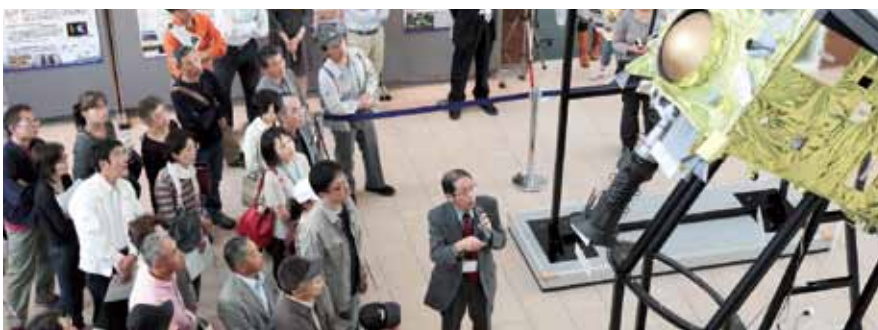
工学研究科 安藤晃氏



理学研究科 中村智樹氏



東北大研究者による講演のようす



来場者にはやぶさの解説をする総合学術博物館 西弘嗣教授

3. 東北大の研究者による講演

はやぶさ計画にかかわっている東北大の研究者による講演も実施しました。前述の 2 名の研究者と、イオンエンジンの開発にかかわった工学研究科・電気通信工学専攻の安藤晃教授が、はやぶさ模型の前で講演をおこないました。はやぶさに直接かかわる研究者の話をしきことのできる貴重な機会とあって大勢の聴衆があつまりました。

開期中の入場者数は 14,089 名。朝 9 時から夕方 6 時まで人が途切れることなくにぎわいました。解説パネルをじっくりと読んだり、ガイドボランティアの説明に熱心に聞き入ったり、来場者の関心の高さがうかがえました。今回の企画に関連して、東北大の宇宙・惑星関連研究を紹介する展示会と、はやぶさ計画のプロジェクトマネージャー川口淳一郎氏の講演会を 2010 年 12 月に予定していますので、どうぞご期待ください。

2010 年 12 月 2 日から 2011 年 1 月末まで
東北大の宇宙・惑星研究の展示会開催
東北大学 川内萩ホール 1F 展示ギャラリー

2010 年 12 月 23 日
はやぶさ計画プロジェクトマネージャー
川口淳一郎氏講演会
東北大学 川内萩ホール

書物と音楽の交わるところ

～ musica e storia intrecciarsi in libro ～



東北大学
学術資源研究公開センター
(総合学術博物館) 助教
小川 知幸

PROFILE
(おがわ ともゆき)
1970年生まれ
専門：ヨーロッパ中世・
近世史、資料論、
出版・メディア論

18世紀の書物の修復

附属図書館で書物の保存修復を始めから5年目の節目の年に、漱石文庫以外の洋書もやってみよう、ということになった。漱石の場合19世紀後半の洋書がほとんどだが、それ以外の貴重図書となると16世紀から18世紀のものも多い。日本でいえば戦国時代から江戸時代にかけての相当広いタイムスパンになる。そうなると書物の造りも大きく変わってくるので、初回は前近代でも比較的近いほうの、具体的には18世紀の、同じ構造の書物をまとめて修復にかけるのがよい、という結論にたっした。

鑑定やドキュメンテーションなど担当の仕事を一通り終えて、修復作業のために書物を移送してしばらくすると、作業をお願いしているアトリエ・スズキから一本のメールが入った。修復中の書物の一つから、「楽譜」が発見されたというのだ。

手書きの楽譜の発見

その書物は、イタリアのナポリで1722年に刊行された法学書だった。(図1) 修復のために、「背」を持ち上げたとき、裏貼りが姿をみせたのだという。そこに手書きの楽譜が使われていた。ということは、



図2: 背の裏から現れた手書きの楽譜

おそらくその時代のものだ。18世紀といえばバロック音楽の時代であり、イタリアならヴィヴァルディの活躍が思いおこされる。しかし楽譜は背固めのニカワと一体化していて、はがそうとすれば壊れてしまうということだった。

作業をいったん停止してもらい、検討に入った。修復は中止か？ だが、将来の破損の可能性が高いということで選び出したのだから、修復を進めなければ、遅かれ早かれ書物は自壊して楽譜と「共倒れ」になる。

手がかりをもとめて

もちろん、300年前の手書きの楽譜をたんに壊してしまっただけということではない。少なくともその前に、楽譜の「正体」を突きとめる責任がある。

方法は二つ。一つは、写真を撮影して送ってもらい、その譜面を読むことである。もう一つは、この書物の出版者がどのような出版をおこなってきたかを調べることである。かりに楽譜出版をなりわいとしていたのなら、印刷が終わって用済みになった原稿を裏貼りとして再利用したということは十分考えられる。その場合、楽譜はすでにどこかで印刷されているはずだ。

コンチェルト・グロッソ

まず、送られた写真から、ためつすがめつ譜面を読んでみる(図2)。全体像はわからないが、複数のパートからなっていて、一部に8小節の休止が指示されている。声楽ではなく器楽だろう。たとえば、第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ピオラ、チェロなどといった小編成の合奏である。コンチェルト・グロッソ(合奏協奏曲)の形式がしっくりくるかもしれない。拍子を細かく刻んでいることから、均整の取れた、中期のイタリア・バロック音楽の雰囲気があるようにも思う。

とすれば、ヴィヴァルディには少し早い。しかも彼はヴェネツィアの人である。この時代のナポリの代表的作曲家は、アレサンドロ・スカラッチティである。彼は多数のオペラや室内カンタータの作曲を手がけ、その楽曲形式においてモーツァルトをはじめ



図1: 18世紀の法学書(東北大学附属図書館蔵)

とする古典学派への橋渡しをした、ナポリ学派の父とされている人物である。時代も場所もぴったりではないか。

出版者は誰か

しかしながら、17世紀末から18世紀初めのナポリには掃いて捨てるほど作曲家がいたはずである。いったい誰が、この書物の出版者とかかわっていたのだろうか。

書物の印記にはラテン語でこうある。「ナポリにおいて、ミカエル・アロイシウス・ムティオの印刷と製本により、1722年に」(Neapoli, Typis ac sumptibus Michalis Aloysii Mutio, 1722)。

だが、この名前では、ほとんど何もヒットしなかった。おそらく「ムティオ」は、当時の学者がたいていそうしていたように、本名をラテン語化したものだろう。彼がイタリア人なら、ミケーレ・ムツィオ(Michele Muzio)と呼ばれていたかもしれない。では、ミドル・ネームのAloysiusは？ 少し複雑だが、これはラテン化した古高ゲルマン語をふたたびラテン語化したもので、つまりはルイス(Louis)のラテン語名である。イタリア語では、ルイーヂ(Luigi)となる。

本名は、「ミケーレ・ルイーヂ・ムツィオ」だったはずである。

ムツィオの楽譜出版

こうした場合に基本文献となりうる *Dizionario Biografico degli Italiani* (イタリア人名辞典) は、まだ Mechetti の項までしか出ていない。ということで、彼の手になる刊行書を地道にリストアップし、ようやく 36 点 51 冊を確認することができた。こうなれば、その実在は間違いないだろう。

ムツィオは 1689 年から 1722 年までの 33 年間にわたって活動し、ほぼコンスタントに年間 1~3 点を刊行している。その 6 割はイタリア語、3 割はラテン語、残る 1 割はスペイン語である。最初の十年間は、ドメニコ・アントニオ・パリーノ (Domenico Antonio Parrino) という人物と共同で出版していたが、その後独立した。そして重要なのは、ムツィオのイタリア語の書物のうち、12 点が音楽関係だということである。

ドラマ・ペル・ムジカ

その大半にはドラマ・ペル・ムジカ (drama per musica) という副題がそえられている。楽譜付き脚本、つまり、オペラ台本である。これらは 1 冊あたり 70~80 ページのリブレットとして出版された。楽譜出版は、彼の出版活動の大きな柱だった。

ムツィオは 1715 年に、それまで続けたオペラ台本の出版をやめてしまったが、7 年のブランクの後に、全 10 巻の法学書を出版した。これが現在修復中の書物である。晩年の大作であった。彼の出版活動のなかでは、むしろこの書物こそ異色だったといっていい。したがって、このとき彼の手もとには、多くの楽譜原稿が残されていたと考えられる。おそらくこの昔に、印刷に付されていたにちがいない。

彼の刊行書のタイトルからは、作曲家として、アルドロヴァンディーニ、オルランディーニ、ヴィンチェンティーニといった名前が散見される。しかし、今回の裏貼りの楽譜が、そのうちの誰かのものなのか、そうでないかは、今後の研究をまたなければならない。

復興と新しい音楽

当時のナポリは人口 25 万人の、パリに次ぐヨーロッパの大都市だった。だが、1656 年にペストに襲われ、多くの人命が失われたことはあまり知られていない。一説では、738 名の音楽家のうち、じつに 553 名が死亡したという (Dinko Fabris, 2007)。したがって、ムツィオが活動した時期は、ナポリの急速な復興期でもあった。おそらく他にも多くの印刷業者が軒をつら



図 3: 取り出された楽譜の一部

ね、劇場で上演されるオペラや器楽曲の譜面を、競うようにして出版していたのだろう。

そのなかから新しい音楽が生まれ、出版によって育まれた。裏貼りの楽譜からは、そんな時代の一瞬が、かいま見えるのではないだろうか。

※

後日、手書きの楽譜は、アトリエ・スズキのご配慮と高い技術力によって、ほとんど無傷のまま取り出すことができた (図 3)。謝意を表したい。

また、譜面読解で貴重なご意見をいただいた仙台シンフォニエッタの松館忠樹さん、千葉正道さん、佐藤由愛さんには、記してお礼申し上げます。



「恐竜発見夢プロジェクト in みやぎ 2010」

—大学博物館体験活動を開催しました—

平成 22 年度子どもゆめ基金助成活動として、8 月 3 日 (火)、4 日 (水) の 2 日間にわたり、「恐竜発見夢プロジェクト in みやぎ 2010」を開催しました。この活動は、小学校高学年~高校生を対象として、宮城県では初めてとなる恐竜化石の発見をめざしています。去年に引きつづき今年も 2 回目のチャレンジとなり、今年こそは恐竜発見なるかとの期待に胸をおどせました。1 日目は実際に宮城県東部の牡鹿半島において中生代の地層を観察し、2 日目は採集した化石のクリーニング、講師による恐竜についてのお話、恐竜の歯化石のレプリカづくりなどをおこないました。

今年も、230 名をこえる多数の応募があり、厳正な抽選の結果 30 名がえらば

れました。1 日目は朝 8 時に大学博物館に集合して、貸し切りバスで牡鹿半島へ出発です。参加者は、5 人ずつ 6 つの班にわかれて、それぞれに大学生や大学院生の班長がついています。バスの中では、特別講師である北九州市立自然史・歴史博物館の大橋智之先生から、恐竜化石の本物を見せてもらい、露頭での恐竜化石発見のイメージトレーニングをしました。2 時間のドライブの後、林道沿いの露頭において中生代ジュラ紀の河川でできたと思われる地層を観察しました。ここでは、植物化石が見つかります。この地層のどこかに、草食恐竜が食べたのと同じ種類の植物も含まれているかもしれません。そして、運がよければ、植物化石といっしょ

に恐竜の化石が見つかるかも。最初は、どれが化石かわからなかった子どもたちも、仲間が形のきれいな植物化石を見つけると、ますますはりきってハンマーをふるいます。でも、この場所では恐竜化石は残念ながら見つかりませんでした。



林道の露頭で化石をさがす



牡鹿半島の海岸の露頭で植物化石をみつけました



海辺の露頭で記念撮影

2 番目の地点は、海岸の露頭です。まずは砂浜において、みんなでお昼ご飯をたべました。目の前の海岸には、海へと突き出た岩礁が見えます。この岩礁は、中生代ジュラ紀の地層でできており、砂岩と泥岩が交互に重なりあう河川の堆積物と考えられています。お昼を食べ終わってから、さっそく浅瀬をわたって岩礁によじのぼり、みんなで化石採集の始まりです。岩礁は足場が狭くて、なかなかハンマーを上手にふるえませんが、黒い泥岩からたくさんの植物の葉の化石が採れました。ここでも時間をかけて化石をさがしましたが、やはり恐竜の骨や歯、足跡はみつきませんでした。それでも、全員が自分の手で植物化石をみつけることができ、みんな笑顔で海岸での記念撮影となりました。帰りのバスでは、同じの班の仲間や班長さんたちともすっかり仲良くなって、いろいろな話をしました。

2 日目は、現地で採集してきた植物化石のクリーニングから始めました。小さなタガネとハンマーを使って、植物化石のまわりについている余分な石を落とし、石にかくれている部分を削りだします。石をはがすと、葉の化石の全体像がわかったり、下から新たな化石が現れたりという発見が

あります。最後は、植物の名前を調べて、ラベルをつくって標本箱に化石といっしょに入れました。クリーニングの次は、化石のレプリカづくりに挑戦です。材料は白亜紀の恐竜 *Spinosaurus* の歯の化石です。午前中は、シリコンでできた化石の型に石膏を流し込んでレプリカができるまで待ちます。型を取るのに使った本物の恐竜の歯の化石は、教室の後ろに飾っておきましたが、それをずっと見ている子どももいました。

大学の教室でお昼ご飯を食べながら、テレビのニュースで昨日の化石発掘の様子が放映されるのをみんなで見ました。昼食後は、特別講師の大橋先生のお話です。大橋先生は、恐竜研究にあこがれて大学に入り、大学院から恐竜研究をはじめられました。大橋先生の話は、恐竜の特徴や、恐竜の分類からはじまり、恐竜の化石はどのように復元するのか、恐竜の色はどうやって決めているのか、恐竜はどうして絶滅したのかなど多岐にわたりました。

大橋先生のお話が終わったころには、石膏のレプリカもすっかり固まって、今度は水彩絵の具を使って恐竜の歯化石に色をつけることになりました。歯の色だから白く塗る子が多いのかと思いきや、自由な発想で塗られた化石は、赤・黄・緑の縞模様だったり、獲物の草食恐竜を食べたばかりの血がしたたる模様が描かれてあったり、じつにユニークな作品ばかりとなりました。最後に、大学博物館で実際の恐竜化石を見学して、来年こそは宮城県初の恐竜を見つけようと、あらためて決心を固めて解散となりました。



採集して来た化石をクリーニングします



大橋先生の講演 恐竜の色は何色？



恐竜の歯レプリカに好きな色を塗ろう

常設展示に人類文化史部門を新設しました



理学部自然史標本館の常設展はこれまで自然史部門が中心でした。そこで、新たに、生命進化の悠久の流れについて人類文化史の一部を設け、旧石器時代から縄文・弥生時代までの展示をおこないました。

旧石器時代のコーナーでは、古い順に、石器のかたちの変化、材料の違いをとおして、石の道具がどのように変わるのかを紹介しました。日本最古の人類遺跡となる大分県早水台遺跡、栃木県星野遺跡、群馬県岩宿D地点遺跡の資料を展示しました。後期旧石器時代では、栃木県磯山遺跡の刃部を磨いた石斧、ヴィーナスではないかといわれる大分県岩戸遺跡のコケン形石製品等、さらに、この時代の終末期に極東アジア地域周辺で土器が出現

したといわれる時期の資料（長崎県福井洞穴から出土した細石刃やそれともなう土器）等を展示し、旧石器文化から縄文文化への変動のようすを紹介しました。

縄文時代のコーナーでは、東北各地で発見された深鉢形土器を古い順にならべ、文様、かたち、色調にどのような変化がみられるかを紹介しました。とくに、「亀ヶ岡文化」と呼ばれる東北地方の一帯で開花した縄文時代晩期のすぐれた土器もあわせて展示しました。また、縄文人が使用した、鹿角製の銚や釣針などの漁労具類、健康や豊穰を祈願するために使われた土偶（秋田県藤株遺跡出土の遮光器土偶）、サルやイノシシ等の動物形土製品、土製仮面、土版、岩版、石刀などの道具類、鹿角製の腰飾り、漆塗りの櫛や耳飾り、ヒスイの玉類などの装飾品類を展示し、縄文人が身につけた繊細かつ精巧な造りの工芸品を紹介しました。これらの資料はすべて東北地方で発見されたものです。

弥生時代のコーナーでは、東北地方に稲作がもたされた新石器時代終末期の資料を展示しました。仙台市南小泉遺跡で

発見された稲の穂を刈る石庖丁、太型蛤刃石斧、岩手県奥州市常盤遺跡の小玉・管玉類や石鍬などの農耕社会になって新たにもたらされた技術や道具類を紹介しました。また、北東北で稲作がおこなわれていたことを発掘であきらかにした青森県田舎館村垂柳遺跡で出土した壺、甕、高坏の「田舎館土器」、炭化米、擦り切石斧、打製石鍬を展示しました。最後に、逸品として、農耕社会を背景とする西南日本の弥生式土器の影響が考えられる、宮城県蔵王町発見の美しい長頸壺の「円田式土器」をご覧ください。



藤株遺跡
遮光器土偶

岩戸遺跡
コケン形石製品

撮影：菊地美紀

ミニ展示

北上山地のアンモナイト

理学部自然史標本館2階ミニ展示コーナーに、東北大学の研究者やその協力者たちによって採集され、研究されてきた北上山地のアンモナイト標本を展示しました。

わが国におけるアンモナイトの学術的な研究が始まったのは、19世紀の終わりころ、わが国に近代地質学が輸入され、外国の地質学者により研究・教育が開始されたころでした。ナウマン象に名を残すナウマン (E. Naumann) が、1881年の北上山地の調査旅行のさい、石巻近郊の井内できつつかのアンモナイト標本を採集

し、ドイツに送りました。これを1888年にドイツのモイソビッチ (Mojsisovics, E.) が論文記載し、セラティテス・ヤポニクス (*Ceratites japonicus* Mojsisovics) などいくつかの新種アンモナイトとして報告しました。その後、北上山地のアンモナイトは多くの研究者により100年以上にわたって研究されており、東北大学では1911年の理科大学の開学以来その研究がひきつがれています。

アンモナイトは古生代中期のシルル紀にオウムガイから分かれてあらわれ、次のデボン紀以降、中生代終わり（白亜紀末）に絶滅するまで、何度かの危機をくぐりぬけて、世界の海洋で広く栄えました。日本にも北海道の白亜紀アンモナイトなど著名なアンモナイト産地がたくさんありますが、デボン紀から白亜紀までのすべての時代のアンモナイトが知られているのは北上山地だけです。このアンモナイトの“宝庫”としての北上山地産の主要な標本を、古生代、三畳紀およびジュラ紀・白亜紀の



Agathiceras sp. 陸前高田市産、ヘルム紀

3つのブースで見ることができます。

なお、北上山地の南部（南部北上帯）は日本列島の土台ともいべき古い地質がよく残されている地体でもあります。この土台をなす5億年～4億4千万年前の基盤岩類やそれらをおおう中期古生代の岩石やその中の化石を紹介するブースも隣接しています。



Hollandites japonicus (Mojsisovics) 石巻市産、三畳紀
撮影：菊地美紀

東北大学総合学術博物館
I n f o r m a t i o n



東北大学総合学術博物館のすべてXI

まっくろ黒鉱 驚きに満ちた鉱石のおしらせ

本年度の企画展として、「まっくろ黒鉱—驚きに満ちた鉱石—」を仙台市科学館にて11月2日(火)~28日(日)の期間に開催します。世界的にも有名となった黒鉱鉱床。この真っ黒で緻密な鉱石は、選鉱がむずかしく19世紀終わりまであまり価値を見いだされていませんでした。しかし、精錬技術の発達によって大きく発展し、日本の重要な鉱産物資源のひとつとなりました。それとともに黒鉱鉱床の研究が始まり、「Kuroko」の名が世界

的に広まっていきました。日本の黒鉱鉱床は、日本海が生まれたとき、その海底の熱水活動で生まれたと考えられています。しかし、その研究の過程では、さまざまな議論がありました。そして、黒鉱鉱床の研究は深海底探査にも発展しました。そこで研究者がみた奇妙な世界。黒鉱はいまだに、鉱床学や地質学だけではなく生物学の分野においても研究がおこなわれています。そのような黒鉱にかかわるさまざまな研究を紹介します。



まっくろ黒鉱—驚きに満ちた鉱石—

場 所：仙台市科学館 3階エントランスホール
会 期：2010年11月2日(火)~28日(日)
共 催：仙台市科学館、仙台市教育委員会
後 援：DOWAホールディングス株式会社
入場無料

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館を共用しています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(例年8月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



総合学術博物館のホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

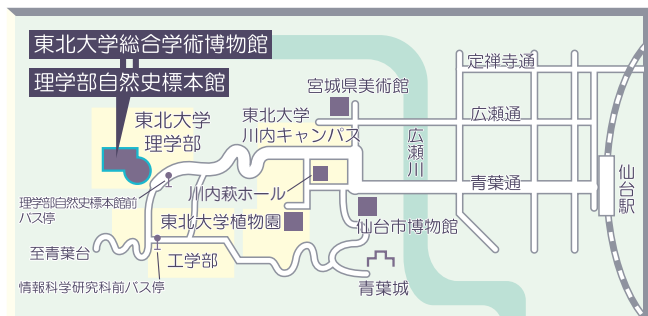
東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum



[オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

- 仙台市営バス
(1)JR仙台駅西口バスプール9番のりばより、「青葉通-理・工学部-仙台城跡南経由 動物公園循環(719系統)」に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩1分。所要約20分。
- (2)または同じく9番のりばより、「宮教大」行きが「青葉台」行き、「成田山」行き(710、713、715系統)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩4分。所要約25分。
- 仙台市観光シティーバス「一ぶる仙台」も利用できます